

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## 阿修羅のごとく

配給／東宝

2003 (平成15) 年9月5日鑑賞

<東宝試写室>

Data

監督：森田芳光

原作：向田邦子

出演：大竹しのぶ／黒木瞳／深津絵里／深田恭子／八千草薫／仲代達矢／小林薫／坂東三津五郎／桃井かおり／木村佳乃／紺野美沙子

### 👁️👁️ みどころ

有名な向田邦子の原作を森田芳光が今あえて監督したもの。大竹しのぶ、黒木瞳、深津絵里、深田恭子の4人姉妹の配役、そしてその父親仲代達矢、母親八千草薫の配役は絶妙。女は阿修羅な生き物。父親の「浮気」事件をきっかけに噴出する4人姉妹の阿修羅性とそのそれぞれの「お相手」との心の動きの描写は見事のひとこと。2時間15分と多少長い、こんな丹念な描き方はあまり見たことがない。ドッと涙する感動作ではないが、しみり、じっくり感動できるオススメの作品だ。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

#### <阿修羅とは？>

阿修羅とは、表面的には、仁・義・礼・智・信を掲げながら、実は猜疑心が強く、互いに事実を曲げ、他人の悪口を言い合う、言い争いの象徴とされるインドの神のこと。女はまさに「阿修羅の生き物」というテーマを『阿修羅のごとく』というタイトルが端的に表現している。「父親の浮気」事件をきっかけに、長女三田村綱子（大竹しのぶ）、次女里見卷子（黒木瞳）、三女竹沢滝子（深津絵里）、四女竹沢咲子（深田恭子）という個性豊かな4人姉妹がもつさまざまな「本性」が「阿修羅」のように噴出する姿を見事に描くとともに、家族の絆の大切さと感動を与えてくれるすごい作品だ。

#### <原作は向田邦子、監督は森田芳光>

原作の『阿修羅のごとく』は向田邦子の作品。

向田邦子は、『時間ですよ』、『寺内貫太郎一家』、『あ・うん』、そして『阿修羅のごとく』など次々と話題作を提供し、大人気作家となったが、1981年8月の台湾旅行中、航空

機事故で突然亡くなった。『阿修羅のごとく』は、その2年前の1979年NHKドラマとして放送され、女性視聴者から圧倒的人気を集めた作品だ。

今回、20作目の監督作品となる森田芳光監督が、このすばらしい原作を実に丹念に映画化し、うまくまとめあげている。

この映画は、2003年11月8日（土）から全国東宝洋画系でロードショー公開されるが、それに先立って、第16回東京国際映画祭オープニング上映作品、2003年モントリオール映画祭コンペ部門正式出品作品とされている。私はこれを2003年9月5日（金）、東宝の試写室でゆっくりと「先行」鑑賞することができた。

### <個性豊かな4人姉妹>

4人姉妹の物語は『若草物語』をはじめとして世界に数多いが、向田邦子が描くこの4人姉妹の物語は『若草物語』のような純粋で心暖まるストーリーではなく、まさに「女の阿修羅性」をテーマにした作品。

4人姉妹の中でもキーとなる人物は、長女三田村綱子（45歳）を演ずる大竹しのぶ。こんな芸達者な適役はまず他にはいない。

次に、夫の浮気（？）の気配を感じながらも、微妙な立場で家庭を守り、多少コミカルな主婦の次女里見卷子（41歳）を演ずるのは、私の大好きな黒木瞳。40歳を過ぎててもその美しさと魅力が全然衰えないところが不思議。

そして、頭がいいものの、不器用で昔から男には縁のない女、そしてずっと四女と張り合ってきた三女竹沢滝子（29歳）を演ずるのが深津絵里。最後に、三女とは逆に、小さい時から美人で男にチャホヤされてきた自信家の四女竹沢咲子（25歳）を演ずるのは、今が旬の女優深キョンこと深田恭子。

### <4人それぞれの阿修羅性>

それぞれ別々の生活をしている4人姉妹が集まったのは昭和54年のある日。三女竹沢滝子が「招集」をかけたためだ。そこで発表されたのは、70歳になる父親竹沢恒太郎（仲代達矢）の浮気。何と、父親には、隠れて面倒を見ている女性と子供（？）がいたという爆弾発言で、興信所の調査までなされていた。

そこから次々と見えてくる、4人姉妹のさまざまな本性と阿修羅性。「誰だって、1つや2つ、後ろめたいことはあるんじゃないの・・・！」という長女三田村綱子の発言だけでは片づけられない、実にドロドロした人間の愛憎のさまが、次から次へと浮かびあがってくる。もっともよく考えてみれば、それぞれ一人一人が人間である以上、これは当然のことだが、それを本当に丹念に、納得できるように構成して描いてみせるところが、向田邦子作品の真骨頂だし、森田芳光監督の腕の見せどころだ。

### <仲代達矢、八千草薫の存在感>

「浮気」事件の張本人の父親、竹沢恒太郎を演ずる仲代達矢は、セリフは少ないものの、圧倒的な存在感。また、この夫を支え、4人の娘たちを育て、今も何一つ不満を述べないで幸せな人生を送っている（ようにみえる）母親、竹沢ふじを演ずる八千草薫も、「尽くす妻」、「優しい母」としての理想的な女性像を示している。しかしその母親も女。夫の浮気相手の女の家の前に立っていたのはなぜか・・・？また、その死後はじめて明らかになった新聞への投書の主は・・・？実は母親の内面にも実に複雑な思いがあったのだ。向田作品は本当に丹念にこの心理を表現している。

### <充実した脇役陣—4人姉妹のお相手(?)>

4人姉妹のそれぞれの「お相手」も面白い。

まず、長女大竹しのぶの浮気相手を演ずる坂東三津五郎とその浮気に手こずる妻を演ずる桃井かおりの2人は、素晴らしく面白い。その丁々発止のやりとりは思わず笑い転げたくなるほど。次に次女黒木瞳の夫の浮気(?)相手の美人秘書を演ずる木村佳乃は、妖しげな魅力十分。登場する場面ではいつも秘書として、すごくカッコいい服を着て、とにかく颯爽としている。そんな秘書からの色っぽい目や思わせぶりなしぐさを見せつけられては、家庭の主婦たる者が勘ぐるのは当然。しかも所詮男はダメ。自宅の電話番号と彼女の電話番号を間違えてかける、というバカみたいな単純なミスを自ら犯してしまうその姿には、もう苦笑いするしかない。

逆に父親の「浮気」相手を演ずる紺野美沙子は控え目な美人。セリフは少ないが、いかにも父親が好きになりそうなタイプ。当然のことだが・・・。

さらに三女深津絵里に好意を示す興信所に勤める不器用な彼氏や、四女深田恭子の恋愛相手のボクサーなど、4人姉妹それぞれの「お相手」のパーソナリティも一人一人見事に表現されている。本当にすばらしい描き方だし、それを表現できる名優ぞろいの脇役陣だ。

### <ストーリーは実に丹念>

夫の浮気相手のアパートの前で倒れた母親八千草薫の死亡によって、いったん崩壊しかけていた家族の絆が回復したところで、映画は終わるのかと思ったら、それは大間違い。

この映画は、その後の一人一人の人間模様についても更に丁寧に描いている。そしてそれが少しずつ涙を誘う場面になってくるのが憎い演出だ。2時間15分と少し長い感じがするものの、最後まで飽きずに楽しむことができる。ドッと涙する感動作ではないが、しみり、じっくり感動できるオススの作品だ。

2003（平成15）年9月6日記